



## ホロカヤン沼の概観

江口 弘・藤岡陽三

十勝平野の海岸線に沿つて、十勝川河口より西南に向ふこと20軒の間に順次、長節沼、勇洞沼、生花苗沼、そしてこれから述べようとするホロカヤン沼と呼ばれる4個の沼が散在している。

ホロカヤン沼は又の名をホリヤニヤ沼とも呼び、十勝国大津村に所在し、大津市街より24軒、大樹市街より約30軒の地点にある。沼の名称は土語若しくはこの変型されたもので、その意味は沼の成因や性状などをよく現わしているものと考えられる。ホリカニヤとは土語で、逆流する河を意味し、この沼の水位が甚だしく上つた時に、沼の西部の

注入河川の水が逆流するのを見て名付けたものということである。海岸の隆起によつて河流の流末が膨脹して沼が形成されたものと考えられるところで、海蝕平衝に達した直線型の海岸砂丘によつて海と隔たつている。注入河川は、チライウンベツ川(別名トーキサル川)、アメマス川、エビノ沢、掬水沢、及びホリカニヤ川の5本であるが、降雨時には1、2の沢が増すということである。川は何れも大きくなく、川の形態をしているの

はチライウンベツ川とアメマス川の2川のみである。ホリカニヤ川はほとんど流れがなく、降雨時に附近の谷地水を集めて沼に入るのであるが、沼の水位が高くなるときは逆流してトーキサル川に流入する。沼が海に最も近い部分が切れて

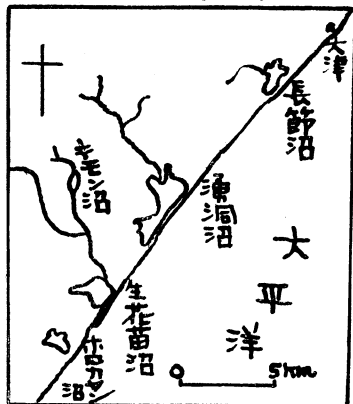
排水路が出来るのは数年に一度で、その年数はだんだん長くなる傾向があり、近時は人工的に切断しなければ、ここに排水路を生じることとはなく、開口された場合でも数時間で閉塞されるということである。

道水産課の道内湖沼及び溜池調査によれば沼の面積は25町歩、5万分の1地形図より

略算すれば面積0.6平方軒となる。しかし常時と渚水時若しくは排水時とは甚だしく相違するようで、大樹町の調査によれば、沼尻が切れた場合はその大部分の沼水が排出されて露出面積は3分の2になつてしまうというのであるが、これは海水面より沼の地盤が高いためである。

本沼は既に昭和13年に木村鮎郎氏他によつて詳細な基礎調査が行われている。(昭和13年、木村鮎郎、川内滋、西田又八郎、昭和13年度河川湖沼養殖適

### 十勝海岸湖



地調査、長節沼、生花苗沼、ホロカヤン沼、北・水・試復命書。) 木村氏他によれば、本沼は今迄、沼底を通じて海との連絡があるように考えられているが、調査の結果は石灰が少く(6.3~5.6mg/L) 過マンガン酸加里消費量が比較的多く(19.3~22.4mg/L)、塩素量は表層61mg/L、下層62mg/Lで海水の浸入はないと考えられ、海との連絡の証跡を明らかにするを得なかつたと述べられている。即ち淡水型の沼として報告されているが、筆者等がこのたび調査した時は、約1ヶ月位前に部落民が沼に棲息する公魚を捕獲するために沼尻を切つて水を落したため、その時海水が入つたまま、沼尻は自然に閉塞されてしまつたという状態の時にめぐり会つたので、沼水の鹹度は高く、汽水型の沼を現出していた。しかし沼尻は現在完全に閉塞されてしまつているので、時日を経るに従つて沼水の鹹度は低下するものと考えらる。淡水型になつた場合の沼水を考えてみれば、PH<7.0を示し、その含有化学成分中、過マンガン酸加里消費量は酸素消費量として>20mg/Lとなり、(本沼の過マンガン酸加里の消費量の高いのは、有機物の多い泥炭水注入の影響による)、石灰分が比較的僅少となるであろうこと等よりみて、本沼は本道の湖沼標式では腐殖栄養型湖沼の上位の部に属するものと考えられ、従つて沼の生産力は中栄養型湖沼よりもやや劣るであろうと考えられるところである。

本沼の水深は、最浅部1米内外、最深部3米で全般的にみて浅い沼である。底質は受水区域が狭小で多量の出水がなく、かつ急激に排水されることもないの

で、浮泥は益々沈積して全沼を通じて深い黒色の浮泥底を呈していた。しかし溶存酸素は底部まで十分溶け込んでいた。沼に注入する各沢の縁辺は多くは泥炭性であり、沼岸の大部分は一帯の高台をなしている。

水温は表面18.1°C~19.0°Cの間にあり(6月8日気温12.0~13.0°C)、受水区域が小さいためと、標高16.8mの低位にあるため、夏期は相等の水温上昇が考えられる。水色は褐色、透明度は2米であつた。

本沼の魚類は、かつては海より浜上したものと考えられるものが棲息して蕃殖しているもので、附近住居者の言を総合してみれば、うぐい、ふな、わかさぎ、あししろほぜ、いとよ、とみよ、あめます、いとう、かわがれい等で、その他しじみが既棲している。しじみは沿岸砂地に相等量蕃殖しているようである。沼岸一帯は水草、水藻が多く、水深2m線以内に密生している主なものは、よし、がま、ゐ、ひし、かわほね、ひつじぐさ等の水草類とせきしようも、いとも等の水藻類である。

かつて本沼は増殖施設をなした事実はなく、又、沼を利用した事実もない。沼が遠隔の地にあるためである。ただ附近住民の食料として鹹等が多少漁獲されていたが、その量も多くはなく、漁業とは認められないものであつた。しかるに近時棲息していた公魚が注入河川であるトクシエンベツ川に浜上して盛んに産卵していることが、大樹町役場水産係長土田氏により発見されるに及び本格的な増殖に乗出したわけで、本年度は阿寒湖産公魚卵2,000万粒の移殖が行われている。

本種増殖の目的とするところは、大樹町長島田繁一氏によれば、部落住民（晩成部落は戸数73戸、永年居住の者は沼の周辺に点在し40戸を数える。他の30余戸は開拓者である）の蛋白補給と、その利益による学校教材の購入にあり。ということである。なほ沼の所有権は本年より大樹町が得た。

本沼に放養する魚種は、水温、水深、水質よりみて、公魚、鯉が適種と考えられる。前に述べたごとく、その水質よりみた湖沼標式は腐殖栄養型の上位の部類に属すると考えられるので、沼の生産力の中栄養型より劣るものと考え、本道の中栄養型湖沼の生産力を1町歩当り25貫とすれば、本沼は1町歩当り10貫内外の生産を得られると見るのが至当と思われ、この生産力は面積0.6平方軒（60町歩）より600貫内外となり、一応増殖計画としては、公魚人工ふ化放流による放養数量2,000万粒で生産見込数は200貫、鯉稚魚放流2万尾で生産見込数は400貫、合計600貫を算出した。

本沼は受水区域狭小なためと泥炭水を受けるから栄養塩類の搬入も多くはな

い。かつ水深が浅く、面積が小さいので広大な養魚池といった感じであるから、大型のうぐい、あめます等の有害魚を極力絶滅して有用魚の放養をなすべきであり、他方沼には石灰施肥を行つて生産力の増強を計ることが必要である。沼尻については大樹町で堰堤を築造する計画がある。沼尻は一帯の岩盤をなし、その距離は短く、水深は浅く、そのため工事は簡単なものと思われる。この堰堤築造によつて、沼の水位の上下は人為的に操作することが可能となり、養魚池的な形態が現出されるものと考え。

筆者等はこのたびまつたく遠隔の地にあるホロキャン沼をおとずれる機会に恵まれた。しかも当日は朝から雨で、沼も丘も眠るがごとく、大自然の姿を一層強く印象づけられた。かつては土人が丸木をあやつりマレットをふるつたであろうこの原始の沼も今や食料増産の一翼をになつて浮び上ろうとしている。遠隔の地で開拓に従事される方々のいこいの場所となり、蛋白の給源地となる日の近からんことを期待してやまない。

(31. 7. 2)

## 協力会連合会表彰さる

北海道鮭鱒保護協力会連合会は、去る8月1日資源保護功労者として日本水産資源協会から表彰された。

表彰式は東京の魚市場で行われ、表彰状の他に記念品として福時計1個が授与された。

この協力の内容は次の通りになっている。

イ、鮭鱒親魚の密漁防止及び放流稚魚の保護に対する協力。

- ロ、鮭鱒孵化施設の拡充整備に対する協力。
- ハ、河川水質汚濁防止。
- ニ、鮭鱒増殖に関する試験調査に対する協力。
- ホ、鮭鱒資源の維持増進に関する啓蒙宣伝。
- ヘ、実施体の詮衡推薦及び指導連絡。
- ト、その他この会の目的達成のため必要な事業。